KOM Town

神楽坂・大塚・目白エリアの店舗や企業を紹介する情報誌「コムタウン」

2014.8.1 VOL.2

Free

ご自由にお持ちください。

Special edition

坂の街

筑土八幡神社参道

地蔵坂

神楽坂

本紙はASA神楽坂・ASA大塚仲町・ASA目白が発行する地域活性情報誌です。地域の新しいお店・おいしいお店・オシャレなお店や昔からこの地域を拠点とされている歴史ある店舗や企業を紹介しています。新聞販売店ならではの機動力と地域に密着した取材力を活かし、最新情報を配信！ ぜひ、地域の皆様の日々の暮らしにお役立てください。

【発行・お問い合せ先】

明日のチカラ、届けます。
Himawarido

ASA神楽坂　〒162-0843新宿区市谷田町3−3　TEL.03-3268-3836
ASA大塚仲町　〒112-0013文京区音羽1-15-12 アルス音羽1F　TEL.03-3941-3068
ASA目白　〒171-0033豊島区高田2-18-24　TEL.03-3971-9436

編集:株式会社朝日メディアネットワーク内KOM Town編集室　TEL.042-548-0578
発 行 日：2014年8月1日
発行部数：58,700部
配布地域：神楽坂、大塚仲町、目白エリア
※本紙記載の記事、写真、イラストなどの無断使用を禁じます。

本誌掲載の店舗情報一覧は下記の QR コードもしくはURL からご確認頂けます

▼URL はこちら! ※スマホ、ケータイ専用ページです。

http://asa-ok.jp/komtown/list/

komtown 店舗情報

※「ページが見つからない」「アクセスできない」場合は、QR コードまたは URL より直接アクセスをして下さい。

KOM Town

coupon card

有効期限：2014年11月30日まで

- KOM Townに掲載されているクーポン特典付の全店舗にご利用できる共通クーポンカードです。
- 各店指定のクーポン特典をご利用の際は、このカードもしくは本紙を店舗スタッフにご提示ください。
- 各店舗広告内のクーポンQRコードから、Webクーポンをご利用頂く事も可能です。

坂の街その① 歴史と文化に彩られた神楽坂エリアの坂道をそぞろ歩き

「まことに江戸には坂が多く、名称のついた坂だけで三百以上もあった」

歴史小説家・司馬遼太郎　紀行エッセイ『街道をゆく』より
参考文献：「街道をゆく（朝日文芸文庫）」司馬遼太郎国土交通省ホームページ

東京には、23区内だけでも700以上の坂があるといわれている。また坂のつく地名も枚挙に暇がない。例えば港区には語尾に「坂」のつく通り名が 80 以上存在し、赤坂周辺には 20 を越える坂が点在。また文京区にも坂道が多く、次いで新宿区、千代田区が名を連ねている。

東京は江戸時代から、すでに「坂の街」だった。歴史小説家・司馬遼太郎は、紀行エッセイ『街道をゆく』の「赤坂散歩」において、「まことに江戸には坂が多く、名称のついた坂だけで三百以上もあった」と記している。さらに同書には「江戸の坂の名のいわれに関心をもった人として、古くは戸田茂睡がいた～茂睡の右の書物の中で江戸三十一の坂について書いている～」というくだりがある。

戸田茂睡《寛永 6 年（1629 年）～宝永 3 年（1706 年）》というのは、『梨本集』など、歌論をはじめとする著述を残している江戸前期の歌人。その中でも興味深いのは、二人連れが名所旧跡を訪ね歩くという体裁で書かれた江戸の地誌『紫の一本』（1683 年成立）。山や川、坂、池などの特徴、伝説や名前の由来などが紹介されており、ここに「かぐら坂」の記述があることを見ると、神楽坂は早くから江戸の名所だったことがわかる。

なぜ東京には、これほど坂が多いのだろうか?　理由のひとつは地形にある。東京の地勢は、西部の山岳地帯、荒川から多摩川の間に広がる「武蔵野台地」、荒川周辺から千葉方面へと広がる「東京低地」に分けられ、長い歴史の中、河川による侵食によって、複雑な起伏を形成してきた。海進の影響で東京低地は低湿地帯化し、利根川や荒川などの浮洲となり、武蔵野台地も削られ、両者には多くの段差が生じていく。

もともと有していた高低差のある地形に加え、人工的な要因が東京に坂を生み出す結果となった。その代表的なものは、徳川家康が行った治水工事である。天正 18 年（1590 年）、家康が入府した頃の江戸は、利根川、荒川をはじめ、多数の川が江戸湾に流れ込み、湿地帯が広がる荒涼とした土地だった。家康は川の氾濫による水害を防ぎ、一方で新田開発を推進、さらに水路を整え、舟による物資の移動を図ろうと、伊奈備前守忠次に命じて治水事業を立ち上げる（蛇足ではあるが、伊達政宗に対する防備の意味もあったという）。寛永6年（1594 年）に始まった工事は、利根川と荒川の流れを付け替えるというもので、60 年の時間をかけて、承応3年（1654 年）に完了。荒川は利根川から分離され、利根川は太平洋に注ぐ形となった。これは「利根川の東遷、荒川の西遷」と呼ばれている。

さらに家康は神田山（現在の駿河台、お茶の水周辺）を切り崩し、その土で日比谷の入り江を埋め立てることで町を広げ、武士や町人を住まわせた。やがて江戸城を中心に水路はもちろん、道も整備されると同時に、台地と埋立地の間にある崖や段差に多くの坂が作られていくのである。なお江戸時代の坂は傾斜がきつく、神楽坂も江戸時代から明治にかけ、勾配を緩和する工事が何度か行われたそうだ。

神楽坂の周辺にある「軽子坂」「朝日坂」「地蔵坂」「弁天坂」「逢坂」「三年坂」「赤城坂」など、現代に残る多くの坂も、江戸時代に作られたものが多いという。これらは 400 年以上前、家康が構想した壮大な都市計画の名残であり、今も人々の生活に息づいているのである。

毘沙門天

牡丹灯籠のヒロイン、お露さんが暮らした旗本屋敷が連なる軽子坂をはじめ、文学の香り漂う坂の数かず。

筑土八幡神社に向かう急階段

東京都内の坂の多くには、長さや大きさにかかわらず名前がつけられている。最も多い名前は、「富士見坂」ということだが、高層建築が立ち並ぶ現在の東京では、そこから富士山を見ることはできないだろうと思われる。

神楽坂周辺の坂もご他聞にもれず、本当に短い距離から長いものまで、名前と由来などが紹介されており、とても興味深い。神楽坂は、1628 年頃、現在の矢来町に屋敷（牛込下屋敷）を拝領した大老・坂井忠勝が、江戸城に登城するために作られた「大老登城道」が元になっている。名前の由来は、神社（筑土八幡神社だとする説が有力）から神楽の音が聞こえたことに因んでいるという。江戸中期には、徳川家の祈願所「善國寺」が移転。本尊の毘沙門天が商売繁盛の神として評判となり、門前に露天が軒を連ねるようになったことをきっかけに、現在に続く花柳界・繁華街が形成されていった。

また、尾崎紅葉、北原白秋、泉鏡花、夏目漱石など、多くの文人墨客に愛された坂としても有名である。「神楽坂」の名は作品の中にも登場し、同地に住んだ鏡花は「神楽坂七不思議」という短編、「神楽坂の唄」を上梓している。

七不思議といっても怖い話ではなく、例えば「蒲焼屋の島金（現在は志満金）の辻行燈を見て、店に飛び込んだら仕立て屋だった（当時、島金の所在地が変わっていたから）」「牛鍋屋いろはは建物だけ大きいが、奥行きはなく、座敷はみんな三角形である」など、ユーモアにあふれた小話が綴られている。

怖い話といえば「軽子坂」のほうであろう。この坂は、江戸時代、幕府への

軽子坂

献上品ほか、神楽河岸（現在の JR 飯田橋付近）から上がる積荷を運搬する主要路であった。縄で編まれた軽籠（かるこ）を背負い、荷物を運ぶ軽子という人足が坂を上り下りしたことから、「軽子坂」の名がついたという。

そして、幕末～明治に活躍した落語家・三遊亭円朝の名作「怪談・牡丹燈籠」の主人公、お露の屋敷があったところ。牛込軽子坂の旗本、飯島平左衛門の娘である彼女は、死してなお、根津にいる恋人の元へと通ったという。この物語は円朝による創作だが、夕闇が落ちたこの坂を歩いていると、なんとなく不可思議な気分がしてくる。

また赤穂浪士で知られる堀部安兵衛が、決闘の際に走り抜けたという「三年坂（三念坂）」にも、「躓くと三年の内に死ぬ」と、ちょっと恐ろしい俗信がある。江戸時代から伝えられている話で、すぐにその土を舐めれば回避できるそうだ。

三年坂

この場所にはもともと、旗本奴の頭領、水野十郎左衛門が住んでいたそうだ。旗本奴とは、江戸時代前期（17 世紀頃）、派手な服装をして、無頼を働いた若い旗本やその奉公人の集団。いわゆる「かぶき者」である。水野は行き過ぎた行動を幕府に咎められて切腹。その後、空地になっていた屋敷跡に天文小屋が建てられたという。

坂の街その② は９ページに掲載

坂の街その② 歴史と文化に彩られた神楽坂エリアの坂道をそぞろ歩き

江戸～明治
それぞれの時代のガイドブックに描かれた
神楽坂と周辺の坂

朝日坂

神楽坂

盛夏も近いので、不思議な伝説や文学にまつわる坂を中心に紹介してきたが、尾崎紅葉が起居し、かつて泉蔵院境内にあった朝日天満宮から名づけられたという「朝日坂」、くびれた形をしている「瓢箪坂」など、神楽坂エリアには他にも訪ねてみたい坂がまだまだ点在している。先にも触れたが、坂はもちろん、神楽坂周辺の各種スポットは江戸初期から名所案内に取り上げられることも多く、そこには当時の景観や名前の由来などが書き綴られている。また高名な浮世絵師に描かれた場所も少なくない。

やはり、いちばん多く紹介されているのは神楽坂であろう。『東海道五十三次』ほか、世界に誇る作品を残した歌川広重（寛政 9 年 1797 年）～安政 5 年 9 月 6 日（1858 年）も例外ではなく、『東都名所（天保2年　1831 年）』で牛込御門へと続く神楽坂のにぎやかな様子を描いている。坂には旗本屋敷、町家と店舗。武士や町人、大人から子どもまで、年齢性別を超えた人々が坂を上り下りしている。よく見ると家族連れ、荷物を運ぶ人足、様ざまな目的でここを訪れているようで、浮世絵からは彼らの声が聞こえてくるようだ。なお東都名所には「坂番付」なるものがあり、神楽坂は大関に記されている。

また同時代の『江戸名所図会』四巻（天保 5 年 1834 年）にも、神楽坂が記載されている。絵を手がけたのは、江戸後期の絵師・長谷川雪旦（安永 7 年 1778 年～天保 14 年　1848 年）で、唐津藩・尾張藩の御用絵師としても知られている。雪旦の「牛込・神楽坂」は高い位置からかなり広い範囲を描いたもので、道幅が広く（約 11m）、途中に善國寺が見える。道沿いには建物が確認でき、往来する人も少なくない。

瓢箪坂

絵に残された坂は他にもあり、明治時代に刊行された「新撰・東京名所図会」には「赤城坂」が紹介されている。この書物は日本初のグラフィック雑誌「風俗画報」を発行していた東陽堂が、明治 29 年（1896 年）にスタートさせた同誌の臨時増刊号。表紙、口絵、挿絵を手がけたのは、明治～大正期の画家・山本松谷（昇雲　明治 3 年　1870 年～ 昭和 40 年　1965 年）で、1000 点を超える作品を手がけ、報道画家としてその名を知られることとなった。この書籍には赤城神社ゆかりの「赤城坂」が記録されており、「峻悪にして車通るべからず」とあることから、当時から勾配がきつく、上り下りに難儀したことが見て取れる。

文学のみならず、絵としても描かれた神楽坂周辺だが、残念なのは、当時記載されていた場所がなくなってしまっていることだろうか。時代の流れといえばいたしかたないが、そこにあったはずの寺社仏閣、老舗などが、時間に埋没してしまったのは惜しい限り。しかし、少なくなってしまったとはいえ、文人墨客や歴史的な有名人の愛用品、彼らが舌鼓を打った店を訪ねることができる。

その一方で、アスファルトに覆われてはいるものの坂自体は今も残っており、その由来は語り継がれている。江戸時代の大老が、明治の作家たちが、そしてその時代を生きた市井の人々が行き交う姿を思いつつ、ちょっとしんどいかもしれないが、神楽坂散策に坂めぐりを加えてみてはいかがだろうか。

（ライター・吉岡里美）

地蔵坂上

地蔵坂

赤城坂